

強制異類婚姻譚

成人向
ADULT ONLY
転載禁止

世丑女







警戒を怠るな

はいっ
カムヅミ隊長



当世は
魔物の蔓延る
戦乱の最中

我々討伐隊は
人類の悲願である
天下平定のために
魔物と戦っている



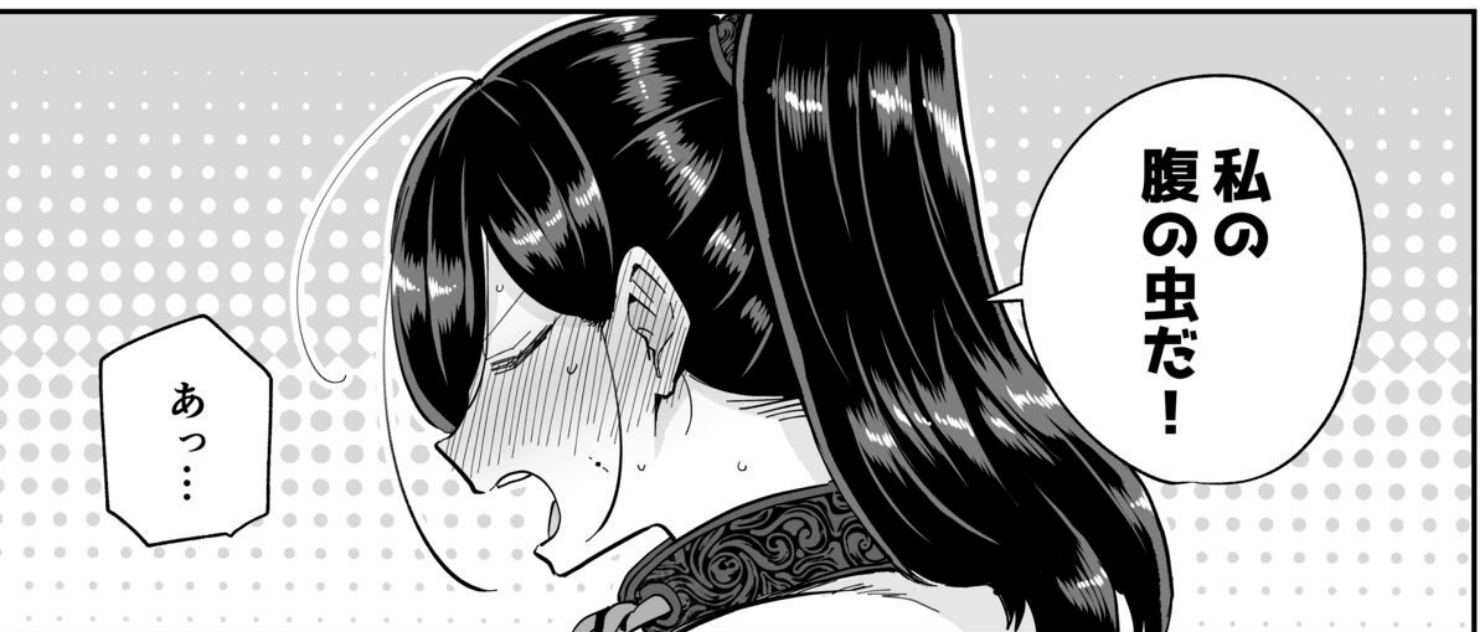
斥候として
実態を掴まねば…

ハ
ウ
ウ
ウ



この辺境も
またその前線—

猿型の魔物が
一帯を支配している
という報告を受けて
我々が派遣された



偵察すること
二刻――





それが
知れただけでも
成果だ

逃げるぞ
イヌキ!

はっ



アイツら
武装
してます!!

人里より
物を盗むという
報告があったが

思ったよりも
知恵があるらしい



!!!



隊ちよー



くっー

上は囿!?





我が名はマカク：
人間共は「猿鬼」などと
呼んでおるらしい



皮肉まじりの
流暢な人語：

これほど高い
知能を持つ魔物が
存在しているとは――



我が領地に立ち入り
あまつさえ
同胞を殺めるとは――

魔物と人間：
どちらが野蛮と
言えようか



先刻の不意打ちも
おそらく
こいつの指示だろう

武装も
統率も
拘束も
火の扱いも

人類にとって
脅威…!!

なんとしても
この情報を
討伐隊に
持ち帰らねば!!



命の代償は
命で贖うべき
だが…

其方らを
殺したとて
大した利もない

私は実利を
取りたい



人の女よ

2人とも
助かりたくば

我が妻になれ

フッ
フザけるな!!

人間が魔物と
なんてッー!!

これまでも
何人か人の女を
攫^{おな}ってきたが

つつ…

子さえ産めば
人里に
帰しておる

如何する？

受けねば
ただ小僧から
殺すだけだ

イヌキッ！

隊長!!
俺に構わず…

産っ…!?

妻ならば
当たり前
だろう

その首を
刎ねよ

わかった…

お前の…
妻になろう

フフ…

賢明だ





用
ならば
ある

次の満月の夜に
私と貴様の
婚儀を執り行う

その立合人に
小僧をあてがう

解放は
その後だ



いや小僧は未だ
牢に繋いでおく

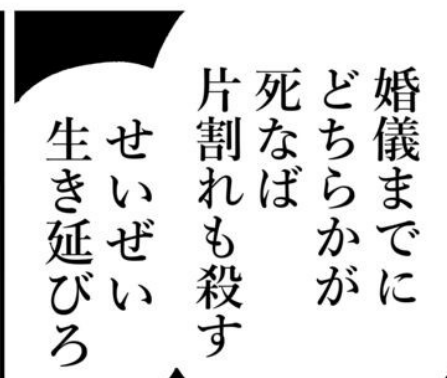
なっ

もう
用は無い筈だ！
解放してやれ！！



要するに
人質か…

狡猾な魔物め



婚儀までに
どちらかが
死なば
片割れも殺す
せいぜい
生き延びろ

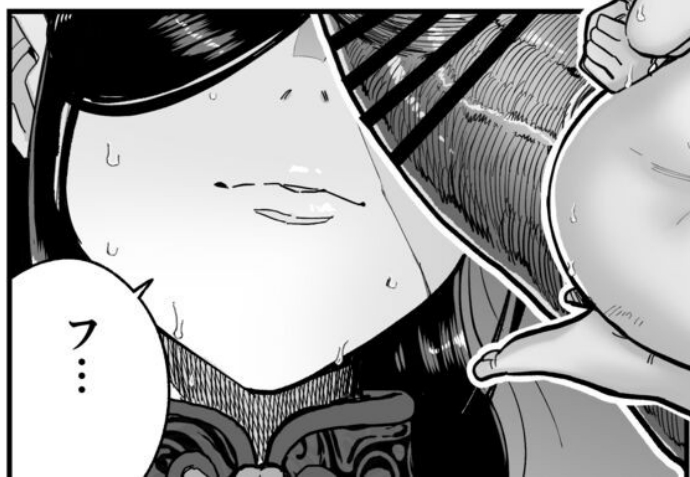


さすれば
これは
“足入れ婚”だ

ゆえに祝言の前に
其方を我が妻として
馴らさねばならん

手始めにまず—





こんな年増に
欲情するとは

どれだけ人間の
真似をしようと
所詮は獣――

いかにして
馴らせるものか
見物だな

たとえ私が
どうなろうと
イヌキは守る

そして
この脅威の存在を
討伐隊へ伝える――

精一杯の虚勢が
却って愛らしいな

すっ
やっ

昼夜のわからぬ
洞窟内で
一睡を許された後――

猿鬼による
夫婦の真似事が
始まった



女陰からは
たらたらと
甘露を垂らし

口からは
喜悦の声を
上げる

我が妻になる
自覚に
溢れておるな

これはっ
お前が食わせた
妙な果実のせいだ…

不老長寿の
伝えある
“仙桃”だ

よく熟れて
美味で
あったろう？

無論人間には
培うことはできぬ

我が妻となる者
だけが味わえる
至上の甘美だ

身体の火照りが
収まるどころか
強まるばかり

私の身体が
私のもので
なくなる…

そういえば
小僧も
目覚めて
飯に
ありついたぞ



彼奴に与えているのは
普通の木の実や沢の魚
だな

大事な介添人
だからな

それなりの
待遇はしておる



イヌキ...

小僧の話が出て
気を持ち直したか

よほど
大事な部下らしい



共に家族を
魔物によって
亡くしたと
申していたが

同じ痛みによる
共感が
其方らの絆を
強めているわけか





もっと
語らおうでは
ないか

其方という
人間のことを
深く知りたく
なった



…果てたか

知ったような
口を…!



おっおっおっ

身も心も
解きほぐし
私と
新たな絆を
結ぼうぞ

それから猿鬼は
私の身体を弄びながら
尋問をするようになった





すんなり
指二本
受け入れる
とは…

我が魔羅を
受け入れる器に
育っておるな



そういえば
先ほど小僧と
話してきたぞ

!!



あの果実を食すと
私が私でなくなる

でなければ
こんな嬌声を
上げることなど
ありえない!

ふぁっ
あっ
あっ

あっ
あっ



其方が
目をかけるのも
頷ける



憎しみを糧に
魔物征伐に臨む
未来ある小僧だ

彼奴は
親兄弟の仇討ちのために
討伐隊に志願したそうだな



ただ私は其方のことを
尋ねたかったのだが
小僧が口を割らんでな
やはり直接
本人から聞くしか
ないようだ



どうなのだ
カムヅミ...

其方も
魔物を憎む
過去を持つか？

わっ
私は...

六年ほど前—
同じ討伐隊
隊士であり

生涯を
誓い合った
男がいたのだ

夫の班から
連絡が途絶え

私の班も
火急で応援に
駆け付けたが

全ては
遅かった

後に件の魔物こそ
討伐できたが
夫の帰らぬ虚しさ
だけが残った

遺された私は
夫の分も
魔物を
討伐するべく
生きている

これが
復讐心か
使命感かは
最早わからぬ



この猿：
そんなことまで
わかるのか



どれほど
睦まじかったか
知らぬが

子を成すことは
なかったようだな



：お互いの
気を通わせるには
遅すぎたし

死が分かつには
早すぎたのだ



これもまた
あの果実の薬効に
違いない

……

：どうした？

私が
子を産めない
石女かもしれず
失望したか？



私は
忌むべき相手に
何を滔々と
語っている……！



数日後—

どういう風の
吹き回しだ？

陽の光が
恋しかろうと
思ってたな

この辺りは
我々を恐れて
里の人間も
立ち入らん



存分に
解放感を味わえ

畜生めが…





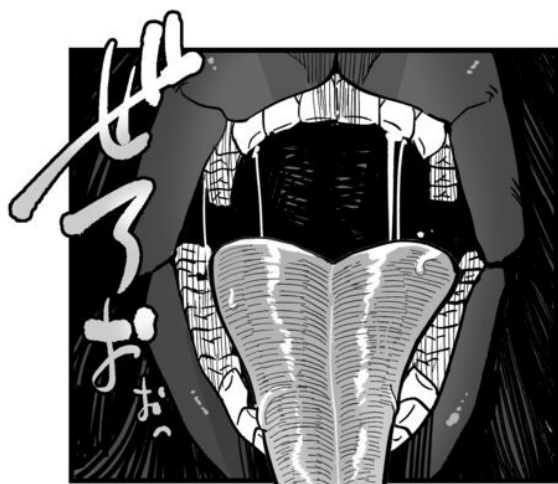
ここ数日…
何もされぬまま
ただ果実だけを
与えられ続けた

それにより常に
酩酊しているような
心地でいる



其方が放つ強烈な雌の匂いに
若い奴らは興奮を隠せぬようだな

黙れ！



少し
離れるか



絶景かな



どれだけ
上の口で
悪態をつこうと

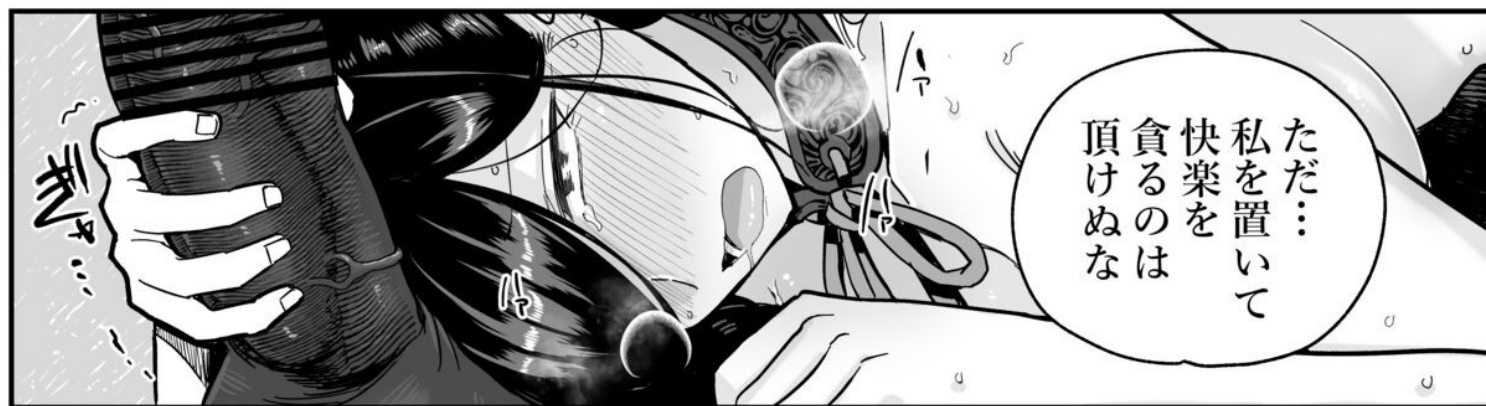
下の口は
甘ったるい汁を
だらしなく漏らす
蜜壺と化しておる

やはり其方は
類稀なる逸材だ

ぐ
お
お
お









猿鬼

お前は一体
何年ここに
棲みついで
いるのだ？

百余年前より
西山を追われて
此处へ流れ着いた

当時は未熟故
他の魔物や
仙人にさえも
殺されかけた

物を盗み
女を攫う奴らが
静かとは？

平穏を求めて
次第に
同胞を束ね
此处で静かに
暮らしておる

“山の魔物が
黄金を蓄えている”
という風の噂に
釣られて来る賊が
後を絶たんのだ

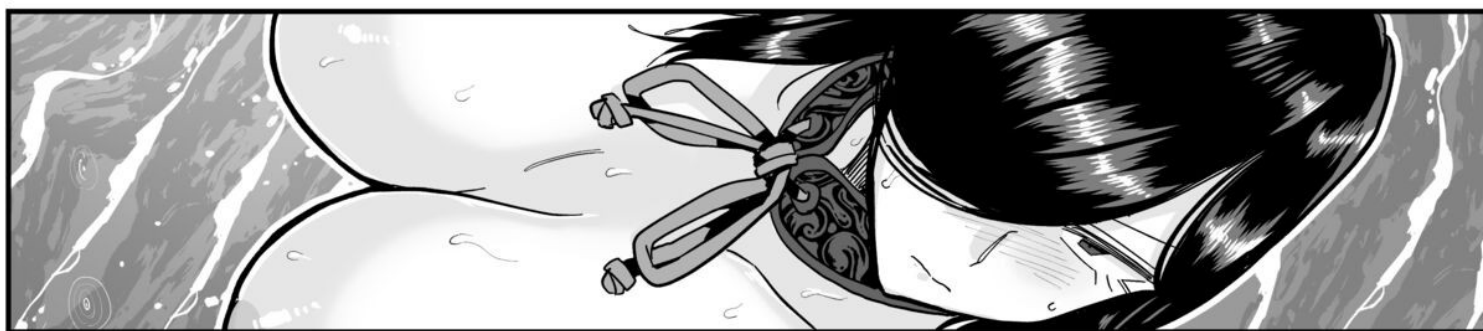
そういう輩を
丁重に歓待して
おるだけだ

我々からは
侵攻せぬ



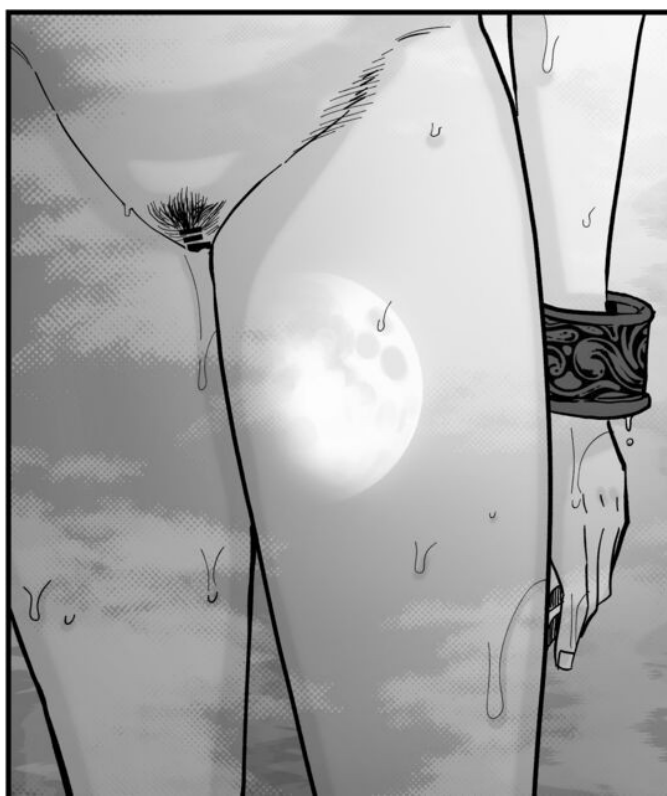
人と魔物が
争わぬ世…

それが
私の宿願
なのだ



なんとか
魔物と
共生できぬ
ものか…

そんな道は
ないかと
思いながら
戦ってるよ



そろそろ
日も暮れる

岩屋堂に
帰るぞ





「アッ」

この様子……
マカクの指示
ではないな？

この
デカイやつ
の
独断専行！

造反か！



小型ではあるが
力は男性隊士の
それと同等……

「アッ」

今の私では
どう足掻いても
抗えない







：口ばかりに
したくないの
ならば
聞かせてくれ

お前の唱える
人と魔物共生の道――

その第一歩に
お前自身は
何をする気だ？

同胞の
学び舎を
作る

今は愚かな
彼奴らのような者も
人と同等の知恵を
つけられれば

人と対話が
できるやも
しれぬからな

カムヅミ

本気
なのか？

今はそのための
教本を作っておる

流行りの往来物を
私なりに解釈し
噛み砕いたものだ



貴様は
これまで会った
どの女より聡明だ



我が妻であると共に
その学び舎の師として
指南してもらいたいのだ

私は子を産めば
帰されるという話
ではなかったか？



白状
しよう



私は其方を
心より愛して
しまった

我が宿願を
共に叶える
伴侶として
見出して
しまったのだ



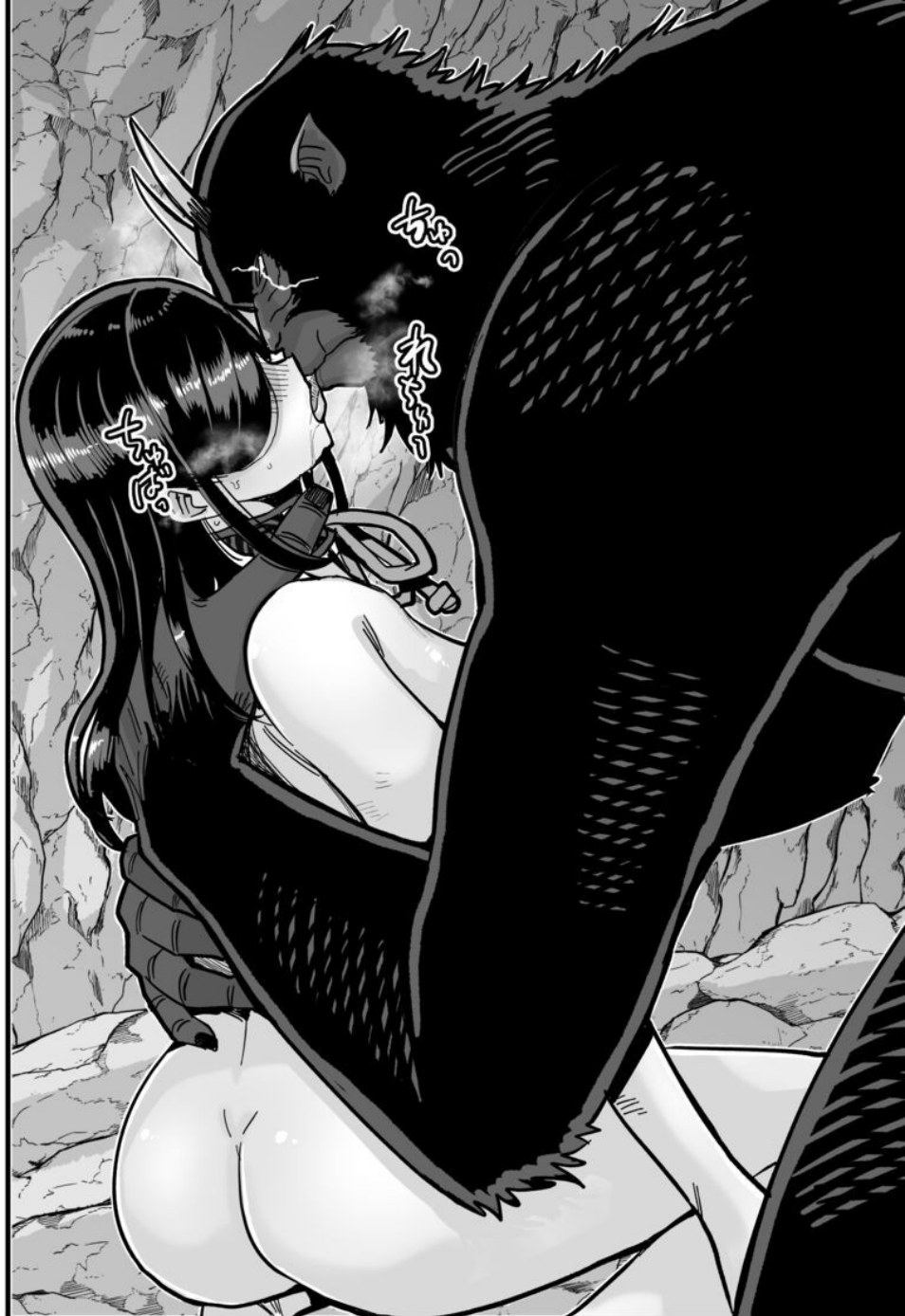
此度の婚儀にて
仮初ではない――



真の夫婦に
なっ**て**ほしい

お前は…

どこまでも
狡猾な男だな





私は
なんと弱く脆い
人間であろうか

しかし
その弱さ故に
惹かれて
しまったのだ

屈辱すら
感じさせてくれぬ
強き魔物に――



そうして
籬の外れた
私には

取り繕うべき
体裁もなかった



しかしマカクは
婚儀の日まで
頑なに交合を避けた



むしろ
"イヌキを
生きて逃がす"
という――

討伐隊隊士としての
最後の使命のために
自ら進んでマカクと
睦もうとさえした



この逸物さえ
その身に
納めてしまえば
全てを終わらせ
られるのに――

仙桃による滾りと
それに反する焦らし

最早私は
肉欲の虜囚と
化していた

そして遂に
その日は来た—



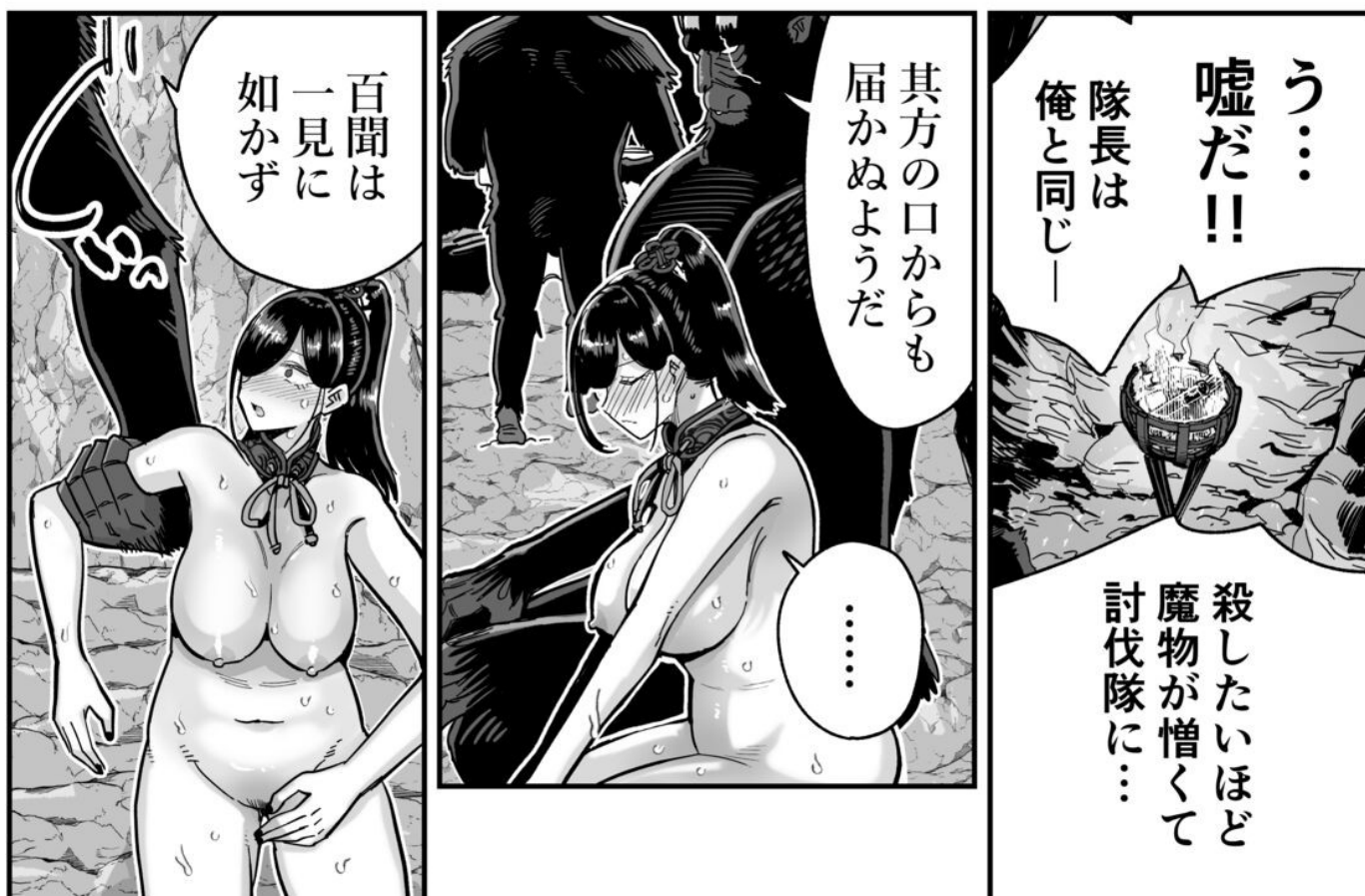
今宵は
めでたき日
なりそうだ

此度は
我らが門出に
立ち合い頂き
誠に感謝する

イヌキ隊士







床入りだ

本儀を以て
我々は夫婦として
永遠に結ばれる

刮目せよ

自由に…

これで—





あー
あっ 入っ

あー
あー
あー

あー

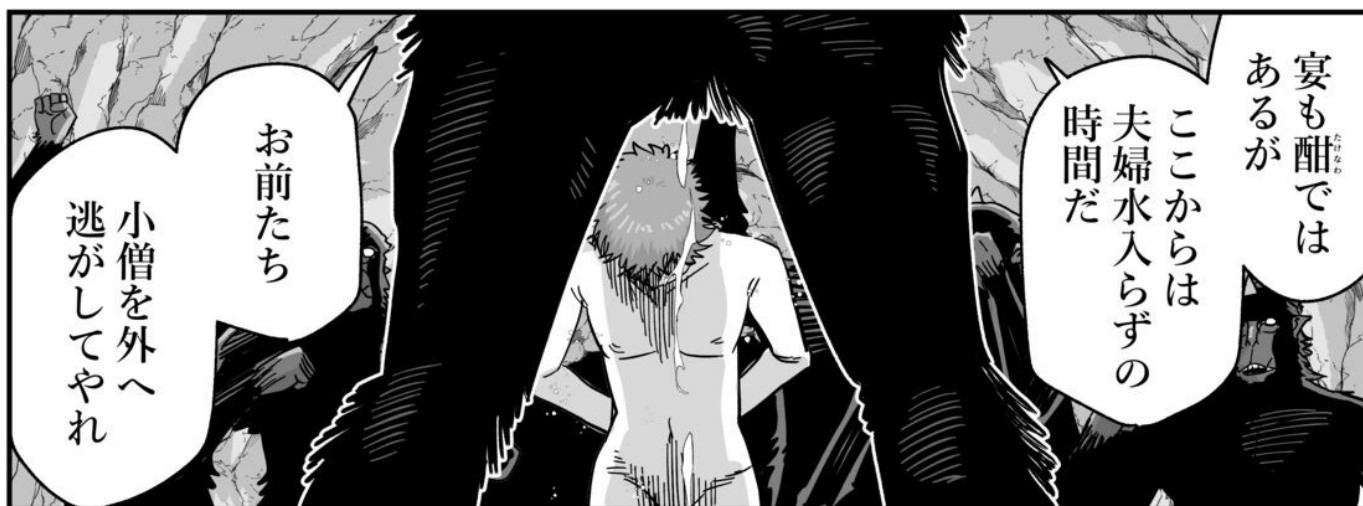
済まない
討伐隊

済まない
イヌキ

済まない
あなたー









私を侮蔑し
そして
忘れるのだ

これでいい

イヌキ
お前は—



俺は隊長のことを
尊敬してたのに…!!



討伐隊として…
人として生きよ

お前は
帰還して
此処とは
違う場所で
役目を果たせ

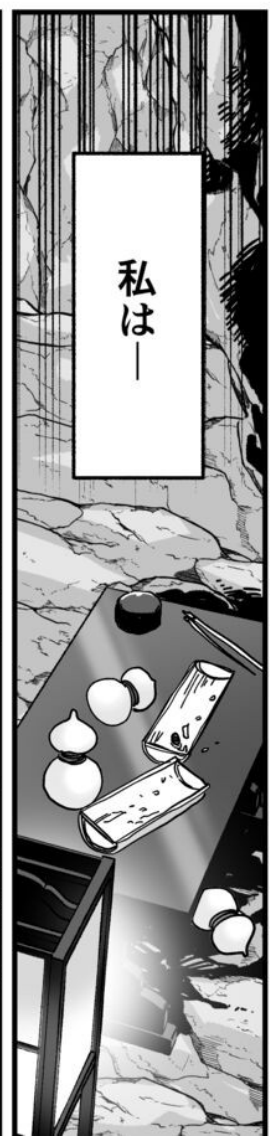


猛りが
鎮まる気が
せぬ

今宵は
眠れると
思うな
カムヅミ

構わぬ…

よいから
来い…



私は—



入れた
だけで…

軽く気を
やってしまったぞ

具合は
どうだ？



す…
すまない

其方だけ
先に
果てるとは
相変わらず
水臭いな



連れ添え
私が
精を出すまで
堪えろ



人と魔物の
間で生きる

半年後

皆
飲み込みも
早い

いろは歌を
諳んじる者も
いるくらいだ

其方の
教え様が
達者なのだ

んん…
世辞はよせ

それより
もっと激しくは
してくれぬのか
マカク？

待て待て
腹の子が驚いて
転び出てきて
しまうぞ？

構わぬさ
そろそろ
出てきても
いい頃だ

まったく…
淫蕩な妻だ

私はそれでも
愛してくれる

お前を
愛しているぞ

この作品はフィクションです。
実在の人物・地名・名称は一切関係ありません。

